



Title	「空」を通した木材の意匠性に関する考察
Author(s)	泊里, 涼子
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「杢」を通した木材の意匠性に関する考察

泊里 涼子 武庫川女子大学

研究の背景

日本では古来より、生活道具から建築物、芸術作品まで多岐にわたる造形物において、木材使用が盛んである。独自の風土のなかで木材に関する知識や技術が培われ、複数の研究者によって、「木の国」「木の文化」と表現されてきた。

こうした「木の文化」において、一部の木材を「銘木」とする慣習がある。銘木とは、概念の端緒を数寄屋建築材とし、明治末期から浸透した呼称であると考えられている。第二次世界大戦を機に市場が確立され、銘木商と呼ばれる業者が専門的に扱うようになった。これまでに本研究では、「銘木」が一般材に設けられた規格から除外されており、その価値判断の大部分が「銘木商」に委ねられてきたことを明らかにした¹⁾。個体差のある木材が、様々な造形の意図に合わせ、「人」によって判断されてきたことにより、銘木が曖昧性の強い性質を帯びたと捉えられる。その一方で、銘木の価値判断の材料のひとつである「杢」は、視覚的に価値を測ることのできる要素として、具体性が際立っている。しかしながらその評価や価値の性質、「木目」との違いなどに関する学術的な見解は、十分に示されていない。

研究方法

本研究ではこれまでに、交錯した複数の観点を分解し、それぞれの分析をおこない、銘木の定義や概念を整理した²⁾。この作業により、銘木に含まれる多様な側面が導き出され、単なる素材としての定義には、あてはめることができないと判断

した。本件では銘木を用いた造形物にみられる「杢」の特徴や使用の意義を捉え、銘木への理解を深め、木材の意匠性に関する考察をおこなった。

「杢」の定義

「杢」は元来、「木で家や器物をつくる人、大工」を意味する言語であったが、現在では、組織が入り組み、模様を呈する木目として認識されている。どのような経緯でこの認識が普及したのかについては、今後の究明が必要であるが、銘木という言葉が使用され始めたといわれる明治末期刊行の『木材ノ工芸的利用』³⁾では、杢が奇なる模様が生じた木目であると解説されている。このことから、時代と共に銘木のも概念も変化するなかで、「杢」が装飾的な木目を意味するようになったと考える。

数寄屋・茶室等における「杢」

近代では、和風建築の床の間周辺等に、杢板が据えられた意匠が多く見られるが、初期の数寄屋や茶室の遺構においては、主張性のない質素な材が使用されたものが多く、いわゆる「杢」を確認することが難しい。中村昌生は、千利休作とされる待庵の床柱や床框を、現代でいう「足場丸太」に例えているが⁴⁾、それほどに何気ない素朴な材によって、詫び寂びの世界観が構築されていた。以降、木材の加工や生産技術の発展と共に、様々な様式が生み出されていくが、床柱にみられる角材から丸太材への推移、あるいは面皮、面付き、ナグリの表現を「杢」の観点からみると、加工技術

により、木目を「杳」に変換させていると捉えることができる。このことから、自然に生じた木目を意図的に操作したものが「杳」であると考えることができる。

銘木市場における「杳」

明治末期頃から、一般木材市場から独立した銘木専門の市場が確立されていった。第二次世界大戦中の木材統制により、銘木に定義を定める必要性が生じたが、その一貫として、「玉杳」「縮杳」、「如輪杳」等、杳の形状や価値の表示を目的として、木目の形状ごとに名称が付された。これら「杳」の名称の起源に関する学術的な見解は、明示されたものが見つからないため、ていないが、本研究では、銘木商の間で商品の認識のために生み出され、普及したものと考えている。動植物等に見立てた「杳」の名称はユーモアがあり、銘木文化の遊興性のあらわれと捉えることもできる。

木工芸における「杳」

銘木市場では、建築材としての需要が大半を占めているが、木工芸の素材としても銘木が使用され、「杳」を活用した作品が多くみられる。特に伝統的木工芸の分野では、鉋や鑿等の刃物で材面を削った後に、表面を磨き整え、漆等で仕上げられる。それらは「杳」をより鮮明に美しくみせるための作業と言っても過言ではなく、多くの時間が割かれる工程である。木工芸の作品においては、「杳」の意匠性が作風を左右する。「杳」を主題とした作品も多くみられる。

現代の銘木における「杳」

本研究では、古代から現代に至る「木の文化」のなかで生じた「銘木」の実態と概念の変容を整理してきた結果⁵、近年の「銘木」は、数寄屋や茶室を源流とする系譜とは違った、新たな系譜を示した。本研究ではこれらを「現代の銘木」と位置付ける。現代では、自然環境の変化と技術発展

による模擬材の出現、素材に対する価値観の変容等の影響を受け、木材そのものが貴重で自然の象徴と捉える傾向がみられる。さらに自然に安らぎや癒しを求めているため、過度に装飾的な「杳」は避けられ、平凡な「木目」に「杳」と同様の価値を見出していると考えられる。

「杳」からみる木の意匠性

「銘木」と同様に、「杳」にもまた、多様な解釈がみられることがわかった。言語の意味では、装飾的な木目をあらわしているが、実際には、必ずしもそのような木目を指すとは限らず、素朴で平凡なものを指すケースもみられた。これらを考察した結果、物質的な木目だけでなく、永い時間をかけて生み出された自然物の中から、造形の意匠や思想にあわせた選択の過程が含まれ「杳」と示されていることを捉えた。自然の美と創造の美との融合が、単なる木目を「杳」へと昇華させるともいえるだろう。どのような観点からも、「杳」を自然の象徴と捉える傾向が感じられたが、この考察を通し、「木目」が樹木や木材にみられる年輪を指していることに対して、「杳」とは人の手を介した造形物にみられる意匠を指し、木目の見せ方によって示される、作者の思想であると結論づけた。

註

- 1 岡田（泊里）涼子「銘木の評価基準と価値設定の研究——ブランディングの観点から」2018、意匠学会誌デザイン理論 73号 pp.1-14
- 2 泊里涼子「銘木を通じた木の文化の変容に関する考察」2022、武庫川女子大学生活環境学博士論文
- 3 農商務省山林局『木材ノ工藝的利用』1912、大日本山林会
- 4 全国銘木青年連合会『資料・銘木集成——用途と用材』1998、学芸出版社
- 5 岡田（泊里）涼子「住宅建材の「銘木」にみる素材観の変容——戦後昭和期から現在まで」2022、日本生活学会 生活学論叢 40号 pp.68-79